



「安心」という贅沢

大田区立雪谷中学校 三年 飯寺 航希

教室に響く笑い声。病院での的確な診察。いつも「おかえり」と迎えてくれる家族。私たちが毎日あたりまえのように過ごしている日常は、実は決して「あたりまえ」ではない。

それらは、目には見えない「安心」という名の贅沢に守られている。そしてその安心を支えているのが、私たちが納めている税金だということに、私はある話をきっかけに気づいた。

ある日、母がふと話してくれた。

「私の友達ね、東日本大震災のときに被災したんだよ」と。

その友人は当時、東北地方に住んでいて、突然の大きな揺れに襲われた。家の中の家具は倒れ、電気も水も止まり、周囲は混乱に包まれたという。不安と寒さに震えながら避難所へ向かったとき、そこには、すでに毛布や水、非常食、簡易トイレなどが準備されていたそうだ。

「全国から支援物資が届いて、自衛隊の人や医療スタッフも来てくれて、本当に助けられたって言ってたよ。」

そう語る母の言葉を聞いて、私は思った。見えないところで、誰かが誰かの「もしも」のために準備してくれていたのだと。そして、その仕組みを

支えていたのが税金という存在だったのだと。

また、私は日々の生活の中でも、税金の力というものを身近に感じている。たとえば学校。私が毎日通う公立中学校では、授業料が無料で、教科書も毎年配られる。スクールカウンセラーという自分の悩みを相談する設備があり、給食も整っている。これらすべてが、社会の誰かが納めてくれた税によって支えられている。

私が安心して多くのことを学び、夢を語ることができるのは、社会全体で教育という機会と夢のあるものを守ってくれているからだと思う。

かつて私は、税金は「取られるもの」「損をするもの」のように感じていた。けれど、今は違う。

たとえば自分に直接関係がないように思えても、それは巡りに巡って、誰かの、そしてきっといつか自分自身の安心につながっていく。災害も、教育も、福祉も、すべてが「誰かの問題」であると同時に、「自分自身のこと」でもあるのだ。

「安心」という言葉は、ただの当たり前ではない。それは、みんなの税金によってつくられた、かけがえのない、「贅沢」だ。

未来の「安心」と「夢のある場」を守るために、私もいつか、納税者の一人としてその支えの輪に加わっていききたい。そして、今の日常と安心が、あたりまえではないということを忘れず、今を大切にしていきたいと思う。